

「共感」と「陶冶」としての道徳

——グルーシー、カバニス、ビランの系譜から——

長坂 祥悟（北海道大学大学院）

本発表は、以下の二点を目的とする。第一に、メヌド・ビランにおける「共感」が、アダム・スミスの「共感」概念に由来するものではあるが、ソフィー・ド・グルーシー（コンドルセ夫人）とカバニスによるその生理学的な解釈のもとで受容された概念であることを明らかにする。第二に、スミスの「共感」概念の受容史から、グルーシー、カバニス、ビランをひとつの系譜として捉えることで、ビランの道徳哲学につながる18世紀末から19世紀初頭のフランスにおける「陶冶」としての道徳の様相を提示する。

ビランの道徳哲学は、「共感」をひとつの原理としている。ビランは、「共感」を「自我」と「他者」の関係の基礎として捉えており、ビランの道徳哲学は、この「自我」と「他者」の関係を軸として展開されていく。

こうしたビランの発想はたしかに、スミスの『道徳感情論』に通ずる。実際に、ビランの道徳理論に対するスミスの影響は、これまでのビラン研究でも指摘されてきた。ところが、ビランにおける「共感」とスミスにおける「共感」には隔りがある。ビランにとって「共感」は、それ自体では「本能」あるいは「情動的」なものである。一方、スミスにおける「共感」は、あくまで他人の立場に関心を向けるある種の「想像力」である。このように、ビランとスミスの「共感」の間にはある種の「ずれ」が生じていることがわかる。

この“ずれ”を積極的に理解するためには、18世紀末から19世紀初頭のフランスにおける、グルーシーからカバニス、そしてビランへと至るスミスの「共感」概念の受容史に注目することが有益である。これは、フランスにおけるスコットランド学派の影響に関する研究では、これまで、さほど光が当てられてこなかった系譜である。

グルーシーの仏訳(1798年)には、彼女がカバニスに宛てた「共感」に関する8通の書簡が付録されている。ここで彼女は、『道徳感情論』においてスミスが「共感」の諸々の「結果」を示すことに終始し、その「第一の原因」について考察していないことに対して遺憾の念を述べている。グルーシーが言う共感の「第一の原因」とは、すべての人間が共通してもち、快樂と苦痛を抱かせるよ「感性」に他ならない。つまり、人間が不幸などに共感できるのは、「感性的な存在者として」なのである。こうして、グルーシーはスミスの「共感」を人間のより本性的な「感性」の働きに引き寄せ、生理学的な解釈の道筋を開く。

こうしたグルーシーの解釈を、カバニスは自身の主著である『人間の身体的なものとの精神的なものとの関係』(1802年)のなかで評価し、彼女による生理学的解釈の方向を押し進める。すなわち、カバニスは「共感」を「本能そのもの」として捉える。したがって、カバニスの「道徳的共感」は、結局のところ「他者と観念や情動を共有する能力」、あるいは「自分の観念や情動を他者と共有したいという欲求」、「他者の意志に働きかけたいという欲求」となるのである。

カバニスの道徳論において、精神的(道徳的)幸福は良好な身体的状態と一致するとされる。したがって、人間が本能的に有する「共感」を含む諸能力の「自由な行使」、そしてその行使における「容易さ」が「幸福の源泉」となるのである。

対してビランは、カバニスから本能としての「共感」概念を引き受けつつも、一方でカバニスの道徳論に反論する。ビランから

すれば、身体的諸能力の「自由な行使」は決して自明のものではない。むしろ、そうした「自由な行使」が如何にして可能となるかが彼の探究の焦点である。それゆえビランの道徳哲学では、「共感」が道徳の源泉でありつつも、「自我」が道徳的主体であるためには、共感が「能動性」と結びついたものでなくてはならない。つまり、自我における「能動性」と情動的な「共感」(受動性)との「二元性」こそが道徳的自我の条件なのである。

このようにして、われわれはグルーシー、カバニスを経てビランへとつながる「共感」についてのひとつの受容史の一線を見取ることができる。この系譜に基づけば、彼らに共通している、感性的な「共感」を養い、修練することで、これを統御する「陶冶」としての道徳が浮かび上がる。

グルーシーは、「感性」にもとづく「共感」について、反省によってもたらされる習慣が、それを恒常的な人間的感情にすると言う。すなわち、彼女にとっての「共感」は「反省」によって拡張、持続させられねばならない。そのために、彼女は「教育」の重要性を主張するのである。

カバニスについて言えば、彼の「模倣」の概念を取り上げることができる。カバニスの「模倣」は「感性的なあらゆる本性」、「人間本性」を特徴づけるものであると同時に「教育の主要な手段」でもある。つまり、カバニスによれば、この「模倣」の能力によって「共感」は陶冶されるのであり、そのことによって人間は社会性を確保するのである。

ビランにおいてもやはり、グルーシー、カバニスに共通する傾向を見出すことができる。ビランは情動的な社会的本能が、反省によって進展するとし、そのために「教育」の重要性を示唆する。さらにはルソーやパスカル、「ヨブ記」などを引き合いに出しながら、快楽を享受する感性的な存在であると同時に、自制する理性的な存在としての「自我」を描こうとするのである。

以上の議論を通じてわれわれは、ビランの「共感」概念が、グルーシー、カバニスによる生理学的解釈のもとで批判的に受容されたものであること、そして彼らが共通して「陶冶」としての道徳を構築しようとしたことを確認することができる。

[参考文献]

- [1] Maine de Biran, *Œuvres de Maine de Biran*, éd. F. Azouvi, t. III, Vrin, Paris, 1988.
- [2] Maine de Biran, *Œuvres de Maine de Biran*, éd. F. Azouvi, t. X-1, Vrin, Paris, 1987.
- [3] Maine de Biran, *Œuvres complètes*, éd. P. Tisserand, t. XII, Slatkine, Genève, 1982.
- [4] Adam Smith, *Théorie des sentiments moraux*, tra. S. de Grouchy, Guillaumin, Paris, 1860.
- [5] Adam Smith, *Théorie des sentiments moraux*, tra. Michaël Biziou et. al., PUF, Paris, 1999.
- [6] P. J. G. Cabanis, *Œuvres philosophique de Cabanis*, t. 1, PUF, Paris, 1956.
- [7] Bernard Baertschi, *Conscience et Réalité*, Droz, Genève, 2005.
- [8] F. J. Picavet, *Les idéologues*, Arno Press, New York, 1975.
- [9] *Philosophie française et philosophie écossaise 1750-1850*, éd. E. Arosio et. al., Vrin, Paris, 2007.